１．はじめに

『ポストモダニズムーーーそれは本当に存在するのだろうか？』

この本の編者であるハル・フォスターが序文の冒頭で述べている問いです。
この問いを定期すると同時に答えているのが、ハーバマスによるエッセイでしょう。
フォスターも、近代というプロジェクトが救出されるためにはそれを乗り越えなくてはならないという意識を少なからず持っています。
このハーバマスのエッセイは、１９８０年にテオドール・Ｗ・アドルノ賞を受賞した際のスピーチであります。この年代は、反モダニズムとしてのポストモダニズムが叫ばれた渦中にあった頃でしょう。しかし、彼はそのような時代の雰囲気とは異なっている姿勢を評されています。
彼は近代のプロジェクトそのものへと立ち返り、その一プログラムとしてモダニズムを見ています。（反抗のモダニズム）
そしてポストモダニズムと呼ばれているものは、そのプログラムのミスによって、保守化してしまった新保守主義に過ぎないと述べています。（反動のモダニズム）
反抗にも反動にも反対することで、かれは近代のプロジェクトを批判的に再適用することを要求しています。

２．近代のプロジェクト

…近代の文化を科学、道徳、芸術の側面において日常的実践と再接合させること

●社会的近代・・・経済ならびに社会の資本主義的な近代化
●文化的近代・・・宗教や形而上学による統一された世界観の崩壊により、実態的理性が3つの文化領域に分離される（ウェーバー）
●美的近代・・・文化的近代の一部　規範化する伝統の機能に反逆、あらゆる規範的なものに反抗する

【社会的近代、文化的近代の持つアポリア】
■社会的近代の持つアポリア
　資本主義的な発展によりうまれる、快楽主義、社会的アイデンティティの欠如、地位や仕事のたっせんを求める競争からの脱落 etc…
■文化的近代の持つアポリア
　3つの文化領域（科学、道徳、芸術）はそれぞれの専門化の文化となり、大衆の文化との間に隔たりが出てくる。

3．啓蒙のプロジェクト
文化の合理化にともなって伝統的実質を奪われた生活世界が貧しくなってしまうのではないかという恐れの増大
↓
科学、道徳、芸術、それぞれ固有の論理にそって発展させると同時に、その文化の蓄積を人々の生活を豊かにするために利用しようとした。
↓
それらの領域の自立性だけでなく、日常的コミュニケーションからの分離をも意味してしまった

「…われわれが啓蒙の志向を、それがいかに脆弱なものであろうと、堅持していこうとすべきなのか、それとも近代というプロジェクト全体がもはやその根拠を失ったと宣言すべきなのか…（p,28 1,14）」

4．誤ったプログラム

【シュールレアリスムの企て】
・芸術と呼ばれるものすべての基準を廃した
・あらゆるものが芸術　誰もが芸術家
・芸術と生活の融和

【彼らの二つの過ち】
●文化領域そのものを壊してしまった
　→中身が流出し何も残らない
●単一の文化領域－芸術－を解放した
　→日常的コミュニケーションにおいては科学、道徳、芸術の3つの領域は互いに結びついているので、この全てを包み込む文化的伝統を必要とする。

物象化された日常的実践を癒すためには、科学、道徳、芸術が無理なく相互作用するしかない

5．未完のプロジェクト

近代のプロジェクトを失敗だとして投げ捨てるのではなく、そこから学ばなくてはならない。
・専門家の文化に生活世界の立場から接近することができる
　例）ペーター・ヴァイス『抵抗の美学』

cf.
・シュールレアリスムの絶望的な反抗が持っていた志向
・アウラを失った芸術作品がいかにして啓発的に需要されるかという関心

→近代というプロジェクトは完遂されてはいない

6．考察

かつての（芸術と生活の融和を無理やり成し遂げようとした）シュールレアリスムの企てと、「近代の文化を日常的実践と再接合する」ことを目指すハーバマスのいう近代というプロジェクトは、志向性という点においてはその一致をみていた。しかし、その企ては、まさにそれが取り払おうとしていた芸術の諸構造をかえって際立てる結果となっただけでなく、そのプロジェクトがもつ3つの側面（科学、道徳、芸術）のうちのひとつにすぎなかったという。そのような意味においてハーバマスは、近代とは今なお進行過程にある「未完のプロジェクト」であると述べているのであろう。
しかしながら、ハーバマスのこのエッセイには以下のような矛盾点を見出すことができる。ハーバマス自身が述べているように、近代性とはそもそも「規範化する伝統の機能に反逆し、あらゆる規範的なものに反抗する」という性質をもつ。しかし、専門化されてしまった文化を日常と結びつけるためのコミュニケーション過程を成り立たせるためには、「認識的領域、道徳的－実践的領域、そして表現的領域のすべてを包み込む文化的伝統が必要とされる」と述べているのである。このことは、ケネス・フランプトンの『批判的地域主義に向けて』の冒頭で引用されているポール・リクールの「どうやって近代化すると同時に源泉へと立ち戻るか」という問題意識に少なからず通じているのではないだろうか。